「東日本大震災」被災支援 NEWS No.27 2012.1.8（隔週配信）
〒330－0844 さいたま市大宮区下町 3－39　関東教区事務所　kantou@desk.email.ne.jp　発行者　飯塚拓也

益子教会復興感謝礼拝を覚えて

澤田　武（宇都宮上町教会牧師　栃木地区委員長）

東日本大震災によって被災しました益子教会の会堂復興工事が無事終了し、２０１１年１２月１１日（日）午後４時より、全てに感謝の想いをもって「復興感謝礼拝」が献げられました。

益子教会の被災状況、再建工事等の詳しい経過につきましては東日本大震災被災支援委員会より定期的に発行されています『「東日本大震災」被災支援ＮＥＷＳ』にて報告されていますのでご覧下さい。

当初益子教会の被害は外壁の部分的な被害と見えましたが、(株) 松下設計の松下充孝兄による建物診断から、教会正面の最上部に十字架を掲げた塔に震災によって無数の亀裂が入っていると診断されました。さらに長年の雨水の浸入によって塔内部も腐食し、倒壊の危険があると判断され、十字架を掲げていた塔の撤去を余儀なくされました。

一旦地上に降ろされた十字架でしたが、塔の再建と共に再び教会正面に、以前と形は異なりますが、ほぼ同じ高さに掲げられました。益子の町に教会の復興を示すように再び十字架が輝きました。

「復興感謝礼拝」司会は益子教会代務者の平山正道師、説教は東日本大震災被災支援委員会統括主任者の飯塚拓也師、奏楽は平山昭子姉のご用にて行なわれました。

他に、益子教会の管理をされています西上義信師（水戸自由が丘教会牧師)、立子姉、工事の設計・監査をされた松下充孝兄、施工業者の松坂屋建材を代表して３名の方、疋田國磨呂前教区議長、栗原清教区書記、和田献一常置委員、澤田武栃木地区委員長、國吉常喜與、真理子宇都宮上町教会役員の総勢１５名が礼拝に集いました。会堂にはオルガンの前奏が響き、一同讃美歌５３７番を賛美してこの感謝の時を称えました。

司会者により、イザヤ書５１章１～３節、使徒言行録３章１～１０節が読まれ、応答の賛美歌３５２番を賛美致しました。

飯塚師より「主はわたしたちのすべて」と題して説教をいただき、十字架が再び益子の空に掲げられた感謝を込めて集う者の心に、感謝な礼拝の意味が解き明かされました。讃美歌２６２番を賛美の後、「とりなしの祈り」を一同で献げました。後、礼拝に集った一人一人と「平和の挨拶」を交わし、共に益子教会の復興工事の終了を感謝し、再び教会の屋根に十字架が輝く時が与えられた喜びを分かち会いました。

約１時間の礼拝,その後約４５分間の懇談の時も備えられ、西上師ご夫妻が心をこめて用意してくださった茶菓をいただいて、良き交わりの時を過ごすことが出来ました。

礼拝が終わった時は既に日は落ちて辺りは暗くなっていましたが、感謝礼拝は益子教会の新たなスタートとなり、また、震災によって被災した私たちのスタートにもなる、力と勇気と希望に満ちたものとなりました。

ここまでも、多くの方の祈りに支えられて益子教会は歩んでまいりましたが、なお、皆様のお祈りに覚えていただき、支えてくださいますよう、お願いいたします。

アジア学院の有機米、味噌、醤油等農場生産品をぜひお求め下さい

遠藤抱一（アジア学院　法人財務室室長）

アジア学院は、1973 年の創立から今日までの 38 年間にほぼ毎年約 30 名、計 1,215 名の NGO に所属する農村開発指導者を養成し、世界 56 か国に送り出しました。（農伝時代 13 年間の卒業生 125 人を含む。）アジア学院は発足の当初から、僻地農村に暮らす少数民族の生活向上の為に働く NGO ワーカーに的を絞って、受け入れてきました。これらの指導者は、経済的な理由で必要な教育研修を受ける機会に恵まれないままその活動を続けています。私達は来られる人より来させたい人を世界中から選び出し、多くの場合渡航費も含め研修に必要な諸費用を募金により支援し、ここ那須塩原の地に招いて来ました。

2010 年度の研修には、このため 1 億 1,350 万円の運営資金が必要でした。このうち 54%を国内から、27%を海外から、そして残る 19%を鶏卵、豚肉、有機米などの農場生産物や加工品の販売やワークキャンプ、JICA などの委託研修などで賄いました。これは、不安定になりがちな寄付金を主とした収入源を、農産物や加工品の販売等により仮に一部でも自ら収入を生み出すことで、年間を通して財政を安定化させる理事会の方針に沿ってのことでした。昨年度は漸く、その販売高が 2,100 万円を超え、目指していた収入全体の 5 分の 1、20%になろうとしていたところでした。

しかしこの 3 月の大震災で主要な建物 2 棟を失ったことに加え、キャンパスの北東 110Kmにある福島第一原発の事故による、建物、農場、動物の飼養に必要な物資の放射能汚染等により事態が一変しました。それからの 10 か月学院は建物や施設設備の復旧・復興とともに放射能によるキャンパス汚染との戦いが続きました。その除染、正しくは除いているのではなく単に移動させているだけなので移染との戦いに明け暮れた日々でした。

この間参加者が年間 1,000 人近くにも達していたワークキャンプの相次ぐ中止、それに伴う食堂利用者や加工品販売の減少、委託研修のキャンセル等々により昨年 11 月現在で、前年同月比 50%の減収に陥り、決算も昨年より一千万円程度の落ち込む見込みになっています。

今春先の見えないまま田植えをし、除草をし、精魂傾けて育てた米は、収穫後の検査で幸い放射性セシウムは 3 ベクレル/Kg（玄米で 11 ベクレル）の検出に止まり自給とともに販売も可能と胸を撫で下ろしました。学院では、独自の放射線残留値の基準を設け、世界で最も厳しいといわれるベラルーシの乳幼児の食べ物の基準、セシウム 37 ベクレル/ Kg を超えるものは、学内でも消費せず勿論外部に販売もしないルールを作りました。

今この未曾有の震災からの復興は勿論焦眉の急ではありますが、それに加えて毎年の経常収支のバランスをとることもまた、学院の働きを将来につなげるためには、忘れてはならない重要な点であります。新年度には、農場もほぼ元の生産力近くに回復するでしょう。研修に必要な建物、施設も夏までには再び整える計画でおります。皆様が、以前と同様に学院の生産物をお求め頂き、ワークキャンプに来て下さり、食堂で農場生産の食事を摂って下さることが、途上国の田舎に暮らす人々の生活向上につながります。新しい 2012 年ここ那須塩原の地で、以前と変わりなく皆様をお迎えできることを願っております。